Collaboration Practices in the Making of Contemporary Art

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金島, 隆弘, Kaneshima, Takahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/391

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

現代美術の創作における協働とその実践

Collaboration Practices in the Making of Contemporary Art

Takahiro Kaneshima 金島　隆弘

はじめに

作品の制作を行わない人間が、美術の展示などの現場に関わる方法として、作品を制作するアーティストとの協働[1]が必要となる。筆者もその一人であり、本大学院博士後期課程に入学してからもアーティストと協働しながら様々なプロジェクトに取り組んできた。その中で、自身だけで作品を制作できるアーティストが、必然とは言い切れない協働に何故取り組み、またそこに何を求めているかを常に意識してきた。

特定の組織に所属せず、インディペンデントの立場にある筆者が担当したプロジェクトは、ギャラリーでの展示から地方での芸術祭まで、大小様々なスケールの展覧会や、行政との協働によるアーティスト支援、バリアフリー対応、アートフェア、クラウドファンディングを活用したプロジェクトなどがある。それぞれの事業の目的に合わせながら、アーティストと協働してプロジェクトに取り組んできたが、その実施と並行し、アーティストに対して協働に関する調査やヒアリングを実施してきた。

本稿では、筆者が近年取り組んできたアートプロジェクト[2]の中から、本稿のテーマに関連する9件を選び、各プロジェクトについて整理した上で、アーティストが実際に取り組んだ作品やプロジェクト、展覧会での事例から、協働についての考察を行った。本稿の執筆を通じ、改めて筆者が博士論文で扱うテーマである協働についての指針としていきたい。

1. 本稿で対象とするアートプロジェクト

(1) アートプロジェクトの分類

アートプロジェクトは、公金を活用して公共の利益を追求する非営利型、民間が主導して事業の利益を追求する営利型に分類できるが、今まで行政が支援するアートプロジェクトのほとんどは非営利型であった。しかし、芸術を取り巻く環境が変化し、事業規模を維持することが難しくなるケースが増えている近年では、非営利、営利を問わず様々なアートプロジェクトを行政が支援し、協働するケースが増えている。また、非営利型においても展示される作品の売買が行われているケースや、非営利型よりも展示として見応えのある営利型のアートプロジェクトも増えており、非営利型、営利型の線引きがより難しくなっている。こういった現状を踏まえ、本稿では、特にアーティストとの協働を意識し、また実際にアーティストへの調査を実施できた9件のプロジェクトを（表1）に沿って分類し、各プロジェクトの文末に番号をふった上で、開催年、開催場所、参加作家、概要などを整理する。

表1.　アートプロジェクトの分類

作品展示型プロジェクト	地域芸術祭や公的施設での展覧会など、作品の展示を主としたアートプロジェクト
作品販売型プロジェクト	アートフェアやギャラリー展示など、作品の販売を主としたアートプロジェクト
プロジェクト実行型	クラウドファンディングやオンライン展示など、実行型のアートプロジェクト

(2) 作品展示型プロジェクト

やんばるアートフェスティバル

2017～2022年、旧塩屋小学校ほか（沖縄）

沖縄本島北部地域で現代美術からクラフトまで幅広いジャンルの作品を展示、紹介する地域芸術祭。2017年より沖縄県や文化庁などからの助成を受けながら、会場と

なっている地域の各村と吉本興業などで結成した実行委員会が主催となって毎年開催され、2021年で5回目をむかえた。毎回20名ほどのアーティストが参加するこのフェスティバルに、筆者は初回からエキシション部門のディレクターとして関わっている。(P1)

S.F. - Splash Factory -[2]
2019年、京都新聞ビル印刷工場跡(京都)
民間の実行委員会が行政や企業の支援を受けながら開催を続けている「KYOTOGRAPHIE」の7回目に設けられた11の展示プログラムのうちの1つ。展示作家である金氏徹平のコラージュ的手法を拡張し、演劇や映画を制作するようにチームを作り、また多くの企業と協働して展示やワークショップなどに取り組んだ。筆者は本展の展示キュレーターとして関わった。(P2)

根の力 The Power of Origin
2021年、大阪日本民芸館(大阪)
大阪府が主導する大阪万博50周年記念プログラムとして、ディレクターに服部滋樹graf代表を迎え、オンライン配信企画「大阪日本民芸館と根の力」「民芸運動から現代へ」と、展示企画「根の力」を開催。筆者は木ノ下智恵子大阪大学准教授と共に共同キュレーターとして関わり、オンライン配信企画への参加と、石塚源太、染谷聡、中村裕太、矢野洋輔などが参加した現代美術セクションの展示会場の企画監修を担当した。(P3)

(3) 作品販売型プロジェクト

現代美術が終わっても[4]
2016年、現代美術艸居(京都)
筆者が本学入学前となるが、本展の企画監修の立場で、研究にあたっての関心事を展覧会として実現できた。美術や工芸の区分けを超え、青山悟、金氏徹平、川端健太郎、桑田卓郎の4名と共に、それぞれの立場から現代美術と対峙しながら、作品の展示とトークイベントを開催した。(P4)

台北当代 Taipei Dandai
2020年、台北世貿中心(台北)
ふるさと納税やクラウドファンディングの仕組みを組み合わせながら、2019年度に京都市が実施した「京都市若手アーティスト応援プロジェクト」に筆者はアドバイザーとして関わった。本プロジェクトの支援を受け、笹岡由梨子と谷中佑輔の2名が、2020年に開催されたアートフェア「台北当代」に参加し、作品の展示と販売を行なった。(P5)

立ち上がる土、しなやかなガラス
2020年、日本橋三越(東京)
岐阜県多治見市で現代陶芸を中心とした展示や販売を行うギャラリーヴォイスと、日本橋三越本店のコンテンポラリーギャラリーとの協働で、陶芸家の加藤智也、川浦紗季、中島晴美、ガラス作家の小山敦子、佐々木雅浩の5名によるグループ展を開催。展示に際し制作したカタログに、筆者は「素材からあらわれる生態的形態」をテーマとした文章を寄稿した。(P6)

Art Collaboration Kyoto
2021年、国立京都国際会館(京都)
内閣府や文化庁などの助成を受け、京都府、CADAN(日本現代美術商協会)、APCA(日本現代美術振興協会)、CVJ(カルチャー・ヴィジョン・ジャパン)などで構成される実行委員会が主催となり、現代美術とコラボレーションをテーマに開催した新しい形のアートフェア。54(国内31、海外23)件のギャラリーが出展した他、企業協賛を受けながら特別企画やサテライトプログラムを開催し、筆者はプログラムディレクターを務めた。(P7)

(4) プロジェクト実行型

tower(KITCHEN)
2020年、京都芸術センター前田珈琲明倫店(京都)
クラウドファンディング運営会社のREADYFOR株式会社と協働し、京都芸術センター内にある前田珈琲の開店20周年を記念して、店内のキッチンを金氏徹平の作品「tower(KITCHEN)」に作り替えたプロジェクト。「KYOTOGRAPHIE」や「KYOTO EXPERIMENT」での作品を実店舗に展開し、建築家の家成俊勝、前田珈琲代表の前田剛、UMMM代表の北原和規などと共に、筆者もプロジェクトメンバーに参画した。(P8)

THEATRE for ALL
2021年、https://theatreforall.net/
文化庁収益力強化事業に採択された株式会社precogが、アクセシビリティに特化したオンライン劇場を開設。筆者はメディア芸術の分野の監修を務め、アクセシビリティの観点から毛利悠子、SIDE COREの2組のアーティストと共に現代美術のデジタルコンテンツを準備し、サイトでの公開を行った。(P9)

2. 協働に関する調査の対象と方法

(1) 対象アーティスト

調査に協力いただいたアーティストは(表2)のとおり、今まで筆者が担当した上述の9件のアートプロジェ

クトに参加した計18組（男性14名、女性7名）である。現代の表現をより幅広く捉えるため、アーティストが制作する作品の素材や形態を、絵画、彫刻、写真、映像から、インスタレーションやパフォーマンスなどの動的な表現、陶芸、ガラス、刺繍などの工芸的な表現まで含まれるよう意識しながら、対象を設定した。

表2.　調査対象アーティスト（50音順）

アーティスト	作品の素材や形態	プロジェクト
青山悟	刺繍（平面）、インスタレーション	P4
石塚源太	漆（平面、立体）	P3
伊藤彩	絵画、彫刻、インスタレーション	P1
usaginingen	パフォーマンス	P1
加藤泉	絵画、彫刻、インスタレーション	P1
金氏徹平	彫刻、インスタレーション、パフォーマンス	P1, P2, P4, P7, P8
川端健太郎	陶芸（立体）	P4
西條茜	陶芸（立体）、パフォーマンス	P7
佐々木雅浩	ガラス（立体）	P6
染谷聡	漆（平面、立体）、調査	P1, P3, P7
谷原菜摘子	絵画	P1
SIDE CORE	映像、インスタレーション	P1, P7, P9
笹岡百梨子	映像、インスタレーション	P5
中島晴美	陶芸（立体）	P6
中村裕太	インスタレーション、調査	P1, P3
毛利悠子	彫刻、映像、インスタレーション	P9
矢津吉隆	立体、インスタレーション	P1, P7
矢野洋輔	木彫	P3

(2) 調査の方法と質問項目

対象としたアーティストに、調査用紙へ回答いただくことを基本としながら、個別の対面形式でのインタビューやメールでの質問を組み合わせて実施した。(表3)に、調査用紙に記載した質問から内容を抜粋したものを掲載する。

表3.　調査での質問内容

質問1 自身の作品制作において協働したことはありますか？	（ある場合）協働した作品3-4点選び、作品毎に詳細を教えてください （ない場合）なぜ協働して作品を制作しないのですか
質問2 （作品になりにくい）アートプロジェクトを協働したことはありますか？	（ある場合）協働したプロジェクト3-4件選び、詳細を教えてください （ない場合）なぜ協働してプロジェクトを行わないのですか
質問3 作品の展示や販売において協働したことはありますか？	（ある場合）協働した事例を3-4件選び、詳細を教えてください （ない場合）なぜ協働して作品の展示や販売を行わないのですか
自由記述欄	（上記回答を書ききれない場合、その他ご意見などあれば本欄をご活用ください）

アーティストからの回答の中で本稿に掲載した内容については、文意が変わらないことを意識した上で、匿名性を保つために固有名詞を削除し、文末にアーティストが扱う作品の素材や形態を記載した。また、回答が質問項目とずれがあった場合は、その内容を適切な質問項目へ移動させた。それぞれの質問への回答と自由記述欄へのコメントについて、以下の3から6まで項目ごとにまとめていく。

3. 作品制作における協働

作品の制作が自身で完結していると考えているアーティストが一定数いる一方、協働して制作している作品が複数あると回答するアーティストも多かった。回答のあった協働の傾向を、以下の通り分類する。

(1) 素材の特性としての協働

協働しやすい、または協働する必要がある素材を扱っている

「海外滞在中に知り合ったアーティストと一緒に一枚の絵を完成させて展示したが、その後仲が悪くなり今では連絡をとっていない。」「2人展をするアーティストが先に描いた絵と対になるように自分も絵を描いて、作品を並べて展示した。」（絵画）

「吹きガラスという技法の特性上、アシスタントがついて制作するのが普通である。できる作品の大きさや形状が、アシスタントの能力や人数によっても大きく変わる。」「協働したアーティストが制作した器物にあわせて私がデザインを考え、装飾やつまみ部分の詳細を協議しながら制作した。」（ガラス）

「友人の陶芸家に素焼きの陶器制作を依頼し、それを素地

として僕が陶漆として仕上げた。」（漆）

(2) 作品のテーマとしての協働

協働すること自体を作品の主題としている

「グループ展で一緒に展示する作家と、一緒に展示する意味を見出したかった。協働したアーティストに下図となるデータを送ってもらった後に刺繍した。」「面白い化学反応を期待し、ミシンと筆で一枚の絵を同時に描く様子を映像に収めた。」（刺繍）

「多くの人に関わってもらいながら、一つの作品を制作するというコンセプトだった。横浜での公開制作を皮切りに、ギャラリーや美術館、また芸術祭に出品し、その都度、多くの参加者を募りました。」（平面）

「コラージュの概念を拡張し、素材として他者そのものを繋ぎ合わせることを目的とした演劇に取り組んだ。小説家、音楽家、劇作家、俳優、建築家、アーティスト、衣装家、照明家などそれぞれの技術やアイデアを持った人が集まり、舞台上の構造物を元に、それぞれの役割や主従関係を入れ替えながら、一つの演劇作品を作り上げた。」（パフォーマンス）

「渋谷の路上生活者（S 氏）にインスタントカメラを渡し、時期を見て渋谷で会い、カメラを受け取って現像、展覧会に出品し、作品の販売を行った。売れた金額を使って S 氏が希望するカメラを渡す計画をしたが、展覧会終了後、S 氏は渋谷から居なくなり、カメラの受け渡しは達成できていないが、展覧会には度々訪れていた。」（写真）

「沖縄出身だが、都心近郊に暮らすスケートチームに参加を依頼。映像作品のテーマがスケートチームの特徴に沿うので作品の内容に適任であると考え、友人を介して出演を依頼した。」（映像）

「工芸の文脈には分業という考え方があり、ガラス工芸にはギャファーと言う他のアーティストのために作品制作を請け負う仕事がある。特に技術的な制約の多い吹きガラスは、自分で制作するには限界があるため、他人の手を借りることが普通である。そこで、私自身が作品についてコンセプトやデザインを立案するのではなく、他者が行ったものを私が協働して制作したらどうなるか、試験的にやってみたかった。」（ガラス、陶芸、染織）

「視覚障害の方との陶片の発掘から、その陶片の触察のプロセスを映像に記録することを協働して行った。」（映像）

「亡くなった作曲家の師匠さんの楽器を活用して、死者とのコラボレーションをテーマにサウンドインスタレーションの作品を制作した。」「音楽家、詩人、朗読する人と協働し、自分の作品に音源を提供してもらい、インスタレーションを構成した。」（インスタレーション）

「当時同じシェアスタジオで制作を共にしていた陶芸家の器に、自分が描いたペインティングのデータをシルクスクリーン転写し、プリントして焼き付けた陶器の作品。器は利休の黒茶碗をイメージした。」（立体）

(3) 自分を拡張するための協働

協働することで、自分に不足している技術を補い、また自分の限界を越える

「絵画の支持体が特殊な素材でサイズも大きいので、母親に縫ってもらっている。」（絵画）

「主に建築士の方と建物のデザインや構造について打ち合わせを重ねながら作品の形状や搬入・設置方法などを綿密に協議しながら作品を制作した。」（ガラス）

「工業扇の羽根部分に LED を設置し電子制御、回転することで様々なパターンが浮かぶ作品。電子制御が必要な作品のため技術的なサポートを受けるため構想段階から制作まで協働した。」「プロジェクションされた映像が 3D グラスをかけて見ることで立体的に飛び出して見える映像彫刻的な作品。協働した作家は、大学の同期で元々油画を専攻していたが 3DCG の高い技術を持ち、コンセプトから制作、発表まで一貫して協働できる稀有な存在。」（立体）

「美大を卒業したての頃、サウンドインスタレーションの作品制作で音楽家と組んで作品を制作した。自分だけでも作品を制作していたが、その限界を感じて、一人では制作できない大型の作品はほぼ協働しながら取り組んでいる。」（インスタレーション）

「互いの分野の専門技術、専門知識を共有することで実現可能なことまた実現困難なことを明らかにしながら新たな作品の構想を生みたかった。一人では重量やサイズ的に制作が難しいものを作りたかった。国籍が違うため、それぞれの文化的背景から生まれるアイデアや発想を期待した。」（陶芸）

「自分が普段扱わない素材を作品に取り入れる場合は、自分が制作してもつまらないと思うので、素材と相談しな

がら、そのまま組み合わせたり、取り入れたりしている。」（彫刻）

「『写す』もしくは『写し間違える』ということが作品のテーマのひとつであり、原画を複製する方法を探していた。」「金という素材と技術に関心があり、自分では制作しえいない技術が必要だった。」「工芸と工業という観点から、企業の持つ最新技術が、どのように自分の作品と関わることができるのかということに関心があった。」（漆）

「金製品を扱う会社と金工作家とのコラボレーション。金工作家に自分の作品を読み取ってもらい、金の素材感や価値を活かし再構築してもらった。」「イタリアのガラス工房のレジデンスに滞在し、工房の職人と誤解、見間違い、無関心なども含めたやりとりを経て、異なった利益と共通の利益を見出し、複数の作品を作り出した。スケッチや写真を見せる、お互いの母国語でない英語でのやりとり、ガラス工房の独特のルールや仕組みに則った技術や方法による造形。」（彫刻）

（4）自分で制作が完結している

他の人とは協働せず、自身だけで作品制作に取り組んでいる

「夫婦二人での活動を軸にしていたため協働の必要性を感じていなかった。」（パフォーマンス）

「時間が合わないことで、一人で作っている時は無理なのかなと。」（陶芸）

「個人作家としてやってきたという来歴から、自分自身の作品での協働という経験は今までない。作業によっては外注することはあり、自分にない技術を他者に任せて作品に仕上げるという経験はあります。」（漆）

「作品制作は自身のみで行っています。」（映像）

「機会がなかったから。私の場合、作品は自分の手で全て作り出したい、という考えがあるからかもしれません。」（木彫）

「柔道の選手に例えるとわかりやすいと思います。団体戦に出ることもありますが、団体戦、つまりグループ展でも戦いは私一人の戦いです。勝ち負けは大切ですがそれ以上にどのように戦うか？ということのほうが大切なのです。そして一本で勝ちたいのです。私の勝利は一本を決めた時しかないと思っています。」（陶芸）

協働によって制作された作品から理解できることを分類すると、その背景には、（1）素材の特性としての協働、（2）作品のテーマとしての協働、（3）自分を拡張するための協働がある。多くの協働には、はっきりとした目的があることが理解できるが、（3）自分を拡張するための協働については、自分に不足している技術を補う目的だけでなく、自分の想定を超えるために、目的が不明確なものや、エラーを期待するための協働もあり、その回答の記載順を目的がはっきりしているものから曖昧なものの順に掲載した。

一方、協働せず、（4）自分で制作が完結している回答については、単に意識しなかった、時間や機会がなかったというアーティストもいれば、作品は協働しないで一人で作り上げるべきものという強い信念をもつアーティストもいて、その意識の程度は大きく異なる。

4. アートプロジェクトにおける協働

アートプロジェクトでの協働については、ほとんどのアーティストが「ある」と答え、「なし」と回答したアーティストは２名のみであった。この２名は作品制作においての協働も「なし」と答えており、制作を自身で一貫したいという強い意志が伺える。「ある」と回答した内容について、以下通り分類する。

（1）イベントの実施や参加のための協働

フェスティバル、シンポジウム、ワークショップ、トークイベントなど、アーティスト個人の範疇を越えた大掛かりなプロジェクトに協働して取り組む

「公開制作、パフォーマンス、トークイベントを同時進行型で行った。アーティストの呼びかけで、大震災直後という状況下における表現活動として意義があるように思えたので参加した。」（絵画、立体、パフォーマンスなど）

「銭湯好きなアーティストでグループを結成して公募企画に応募した。あらゆる場所を『湯の場』に変容させるお風呂制作ユニットとして、六甲ミーツアートでの展示の機会を得た。」（漆、染織、調査など）

「ガラス文化の啓蒙活動と自作品の発信のために、プロジェクトを企画。金沢の地域おこしの流れで、工房のガラス専門員と協働し、市内のギャラリーやショップ、飲食店などを会場に展示プロジェクトを実施した。」「大学がカンファレンスに共催することとなり、実行委員会を

立ち上げて、市やライオンズクラブなどの支援を受けながら、ワークショップ・シンポジウム・展覧会・教育プログラムを企画運営し、最後に報告書を作成した。」（ガラス）

「応用美術としての工芸を作り手の視点から読み解くことを目的に、6名のアーティストでユニットを結成し、ワークショップやイベントを開催。瀬戸内国際芸術祭にも参加し、メンバー全員が島に数週間滞在し、共同生活しながら島の素材などを用いてひとつの作品を共作した。」（染織、漆、調査など）

「普段は展示会場としては使われていない渋谷の3会場と協働して個展を開催した。知り合い全員に声をかけて、展示だけでなく、トークイベント、DJイベント、出店、パフォーマンスなどのイベントを毎週末開催していた。自分の作品を見せたいというよりみんなで楽しみたい、という意識だった。」（インスタレーション）

(2) 共に演じるための協働

音楽や演劇などの美術以外のシステムに、アーティストが組み込まれたり、組み込んだりする場合に協働する

「企画のディレクターから、コンテンポラリーダンサーとの共作依頼があった。自分たちにとって新しい試みで興味を持ったこと。他の表現をしている方との共作で新しい表現方法への発見となる可能性を期待したので快諾した。」（パフォーマンス）

「クリエイティブな活動としてのバンドを組んでライブ演奏をしている。音楽活動を通じて得た刺激が制作する絵画にも返ってくる。ジャケット用のイラストを描くのも楽しい。」（絵画）

「演劇という形からスタートし、劇場、美術館、その他のスペースやジャンルを横断しながら、新しいモノとヒトのあり方を提示するプロジェクトを行うため、異ジャンルのアーティストの協働が有効であると考えた。」（彫刻、パフォーマンス）

「自身初のライブ映像パフォーマンス。作品制作は自身のみで行なっていたが、プロジェクトは協働したほうが面白くなると思った。」（映像、パフォーマンス）

「パフォーマンスは演者に依頼をして行うものが多いが、自身の身体を使ったパフォーマンスに取り組んだ際は、身体の使い方や呼吸法などアドバイスを受けながら行った。映像記録も別の作家にお願いした。」（陶芸、パフォーマンス）

「自分の映像作品に合わせ、二人の音楽家にライブで即興演奏をしてもらった。」（映像）

「音楽プロデューサーと一緒にライブ活動のような形で自分の作品を発表させてもらっていた。」「演出家、音楽家と共にフェスティバルの演目に参加。近代バレエの傑作を現代の視点から更新するプログラムとなった。」（インスタレーション）

(3) 場所づくりのための協働

作品のスケールを超えた場所づくり、拠点作りのためにアーティストが建築家などと協働する

「建築家、喫茶店オーナー、キュレーター、デザイナーなどとアイデアを出し合い、形態、運営方法、そこで行われる出来事、実現方法などを含めた作品として考案した。」（彫刻）

「瀬戸内国際芸術祭にて展覧会の中に泊まるをコンセプトにした宿泊型のアートスペースを予備校時代の友人と共に3ヶ月間限定で運営。展示作家やコーディネーターも参加した。」（立体）

(4) 調査のための協働

調査において、より質の高い情報を収集するために、アーティストが専門家と協働する

「京都市内に点在する路傍祠の調査から始まったプロジェクト。地蔵の調査を行なっていたアーティストと、タイルの調査を行なっていた私が、それぞれに制作を行うかたちで2014年に展覧会を行い、その後、協働での制作へと次第に移行してこれまでに展覧会を8回開催した。」（調査）

「漆絵のリサーチプロジェクトに、漆の職人や研究者に参加してもらい、調査への同行、協力いただいた。アーカイブの記録集に多様な意見や視点を取り入れ、内容を充実させるだけでなく、イラストやテキストなど自分ができない技術も協働で取り入れた。」「郷土玩具に興味があり、漆と陶芸のアーティストや研究者と共に川崎や京都で実物調査を行い、調査を基に復元制作を行った。」（漆、陶芸）

(5) 作品に関連する制作物のための協働
作品以外の制作物を、出資者や企業、デザイナーなどと協働してアーティストが取り組む

「10年ほど付き合いのあるコレクターに作品集を作りたいと話したのがきっかけで、クラウドファウンディングを立ち上げていただいて制作。クラウドファンディングの返礼品として陶器製のコラボランプを制作した。」「ファッションブランドとコラボして、Tシャツ、マスク、キーホルダー、ステッカーを提案し、結果全てグッズ化された。」(絵画)

「自分が制作した作品を型で抜いてソフビを制作した。プロの意見を聞きながらソフビの素材と相談しながら作っている感じ。」「釣りが趣味である延長で、釣具メーカーからロゴのデザインを頼まれて楽しくデザインした。」「カタログの制作もデザイナーとの協働で、ずっと同じ人に頼んでいる。」(絵画)

「母親がドローイング作品の画像を使って布のバッグを制作した。趣味の一環で布バッグを制作したものの、これといった目的はなかったと思われるが、今後はお世話になっている方々に配布し、来年の美術館の個展での販売も検討している。」(絵画)

「これまで戦前期の民藝運動の周縁的な工芸運動に関心を向けてきたが、文章を書くことではない展開としてデザイナーとの対話を協働することを考え、京都の書店にて全5回のトークイベントを開催し、そのトークの文字起こしをもとに書籍を刊行した。」(調査)

「展示された作品がドイツのキュレーターに取り上げられ、カタログ制作のプロジェクトに参加した。」(陶芸)

アートプロジェクトでの協働についての内容は、(1) イベントの実施や参加のため、(2) 共に演じるため、(3) 場所づくりのため、(4) 調査のため、(5) 作品に関連する制作物のため、に分類できた。多くの人の協力で成り立つイベントや、美術以外の専門性、経験や知識が求められる演劇、音楽、場所づくり、調査において、アーティストは協働して取り組む。また、自分の作品を展示以外の方法で広く認識させて普及するために、企業などと協働したり、関連グッズを制作したりといった協働もある。いずれも、一人で制作できる作品の範囲を超えた規模、アーティスト自身の持つ専門性以外の経験や知識が必要なケースが出てきた場合、アーティストは積極的に協働する。

5. 作品の展示や販売における協働

制作した作品の展示や販売を行う際、アーティストだけでは困難であり、様々な人と一緒に作業することが多い。しかし、それにも関わらず、本問に「ある」と答え、詳細を記載したアーティストは8組に留まったが、その回答について、以下に分類する。

(1) アーティスト同士やキュレーターとの協働
アーティストが主催側に立つなど、展示に能動的に関わる場合、プロジェクトに一緒に取り組むアーティストやキュレーターとの作業を協働と捉える

「私が提示した作品の中からそれぞれの華道家が好きな作品を選択して花を生け、各自の空間を完成するスタイルで展示をした。」「展示した施設の担当者や作品の出品者とDMやカタログについて様々な話し合いを行い、展示計画や展示及び会期中の受付に対しても協働した。」「ドイツ人がキュレーションする展示に参加する日本人同士で情報交換しながら、作品の輸送やキュレーターとの打ち合わせにのぞんだ。」(ガラス)

「イベントのフリンジ企画として、キュレーターと複数のアーティストと共に制作した映像作品を、会場で展示した。」(映像)

「それぞれの経験を持ち寄って共同で制作した作品を展示する際、その展示構成はお互いに意見を出し合いながら行った。」(陶芸)

「知り合いのアーティストがキュレーションしたグループ展に参加した。グループ展をあまり積極的にはやってこなかったので、良い機会だと思った。」(木彫)

「美術館のキュレーターと共に展覧会の構成を考えることから始め、調査をもとにした資料展示と呼応する形で作品を制作した。」(調査)

(2) 関係性の良いギャラリーとの協働
ギャラリーの展示でも、自分にできない部分を補ってくれているという意識があるなど、関係性が良好な場合は、協働という認識でギャラリーとの関係を捉える

「ギャラリーに尽力してもらったので、コラボレーション展示の会場探しや、クレジットの扱いも問題が起こらな

かった。」（絵画）

「海外での作品の展示と販売のほとんどは海外のギャラリーに任せている。今まで幾つかのギャラリーと組んだこともあるが、方向性や目的が違うと無理に続けない。今の海外ギャラリーとの相性もいいし、所属アーティストとの交流など、自身の活動も更に広がり、世界における日本の特殊性を再認識できている。」「海外ギャラリーは、アーティストのために活動しているというよりも、アーティストがあるからギャラリーがあると意識が強いのかもしれない。」（絵画）

「ギャラリーにてグループ展を企画し、開催する上で協働し、作家の提案やシンポジウムの企画を担当した。」（ガラス）

「ギャラリーでの展示に際しての作品や額の選定、作品販売まで全てを担当してくれた。」「美術館での個展に際してギャラリーが、コレクターからの展示作品の預かり、カタログの作成、展覧会の広報活動、デザイナーへの依頼、設営会社の手配、照明器具の配置、監視バイトの手配、助成いただいた財団とのコミュニケーションなどを担当してくれた。」（絵画）

「各国、各地域のギャラリーとプロジェクトベースで契約し、作品の展示と販売をしてくれている。」（彫刻）

作品の展示や販売においては、美術館やギャラリーなど、関わる人の立場や役割がよりはっきりしているため、アーティストにとっては、協働というより、分業や委託といった意識が強く働いているかもしれない。しかし、より対等な関係でプロジェクトに関係する場合や、海外など、自分の範疇を超えたところで作品を販売する場合は、アーティスト同士に限らず、(1) キュレーターや、(2) ギャラリストとの作業についても協働として捉えているアーティストは多い。

6. 協働に対するアーティストの姿勢

特にコラボレーションを強く意識しているアーティストからは、それぞれの質問への回答とは別に、協働全般に対しての意見をいただいた。今までの回答の内容を補完するものも多く、文末にアーティスト名を記載した上で以下に掲載する。

「個人名で作家活動していると、どうしても作家としての個人を意識するが、何回かの協働作業において自己を手放せる瞬間があり、それは協働の魅力であると思う。ただどういった相手と仕事をするのかというのは大きな問題で、信用信頼、価値観の共有あってのこと。自力ではなく他力による作品制作であったり、自分が消える感覚であったり、そういった魅力が協働にはある。その場の現象や状況に身を委ね、他力の中に自分を置いてみる、もちろん舵取りは必要ですが、その流れにこそ答えがあるような気がする。」（石塚）

「作品は一人で作れると思っていても、キャンバスや絵の具ですら誰かから買わないといけないし、人と関わらざるを得ない。一人で仕事はできるけど、絶対に行き詰るので、画材を変えたり、モチーフを変えたり、人と会ったりすることで制作のモチベーションを上げることができる。」「自分だけで悶々と考えるよりも、他者との交流で自分の限界を突破できる。自分も若い頃は上手くいかなかったし、突破できない人が大半かもしれないが、色々な協働で今では創作が自在になっている。自分は組んでストレスない人と協働し、その関係性を長く続けている。展開の仕方はアーティストで異なるが、止まったら終わりだと思う。」（加藤）

「基本的に全ての展覧会やイベントなど、他者に向けて発信する時は、美術館、キュレーター、デザイナー、技術者などとのコラボレーションであると考えている。一人で作品を作る時も、素材の出自や作品が成立する文脈、影響関係などを考えると頭のどこかで常に誰かとの協働であるという意識がある。これはコラージュという手法や概念を常に意識していることや、現代の情報化社会や物の流通の状況にも影響されている考え方かもしれない。」（金氏）

「技術的なクオリティを求めるのであれば協働は非常に有効であるが、作品表現の塩梅を共有するのは難しく、丁寧なやり取りが必要になる。」「オリジナティを求めることとは違うかたちで作品があらわれてくる面白さがある。例えばグループでの作品の制作では、それぞれが良い意味で無責任。自作ではないという割り切りがあることで、作品がユーモラスにあらわれてくることがある。」「工芸と工業の関係を考えるうえで、色々な可能性のある面白いことだと感じる。その時作り手にはどのような立ち位置があるのか関心がある。」（染谷）

「私が制作する作品のほとんどは、コラボレーションでできていると思う。みんなでお金を出し合ってインスタレーションを制作した大学在学時から、個人でも作品は

制作していたけど、大きな作品は一人では作れないと思って、グループワークの方が自分にはフィットしていると感じている。」「大学で学生と接するようになってから、自分の範疇を超えたアーティストとコラボレーションをして、自分では思いつかない、自分の意識を超えるようなプロジェクトをしてみたい。」（毛利）

いただいたコメントからは、以下の通り、協働の効果やそれ自体の魅力、そして協働における相性について述べる内容があった。

（1）制作における協働の効果

「制作のモチベーションを上げる」「他者との交流で自分の限界を突破できる」「素材の出自や作品が成立する文脈、影響関係などを考えると常に誰かとの協働である」

（2）協働自体の魅力

「他力による作品制作や、自分が消える感覚が魅力」「オリジナティを求めることとは違うかたちで作品があらわれてくる面白さ」「自作ではないという割り切りがあることで、作品がユーモラスにあらわれてくる」「工芸と工業の関係を考えるうえで、色々な可能性のある」「自分では思いつかない、自分の意識を超える」

（3）制作と協働との相性

「どういった相手と仕事をするのかというのは大きな問題で、信用信頼、価値観の共有あってのこと」「組んでストレスない人と協働し、その関係性を長く続けている」「作品表現の塩梅を共有するのは難しく、丁寧なやり取りが必要」「グループワークの方が自分にはフィットしている」

おわりに

本稿では、筆者がアートプロジェクトにおいて協働したアーティストに対し、協働についての調査やヒアリング行うことで、その目的や傾向などを把握し、理解することができた。アートプロジェクトにおいては、ほとんどのアーティストが協働を意識しており、自分一人では手に負えない「イベントの実施や参加のため」、「共に演じるため」、「場所づくりのため」、「調査のため」、「作品に関連する制作物のため」に積極的に協働している。

作品の制作においても、一定数のアーティストが、「素材の特性としての協働」、「作品のテーマとしての協働」、「自分を拡張するための協働」をしている。もちろん、協働しないことに強い信念を持つアーティストもいるが、協働するアーティストのコメントからは、自身の制作にも良い影響を与えていると認識し、また自身を越えた協働から生まれてくる面白さに魅力を感じていることも分かった。

また、作品の展示や販売においても、アーティスト同士の協働に限らず、キュレーターやギャラリストとの作業を分業や外注としてではなく、協働としてよりポジティブに捉えているアーティストもいた。いずれにしても、協働において組む相手と相性の問題について、アーティストは強く意識しており、その意識から協働するアーティストやキュレーター、ギャラリストとの関係性や評価を量ることができるかもしれない。

こういった現代における協働の視点から、その概念を広く捉え、筆者の研究対象である河井寛次郎の創作を見つめ直し、そこでのさまざまな協働を整理しながら理解を進めていきたい。また、河井が参画した民藝運動についても、創作活動における大いなる協働と捉え、その活動の中での河井の役割にまで言及したいと考えている。

註

1　協働には他に、コプロダクションやパートナーシップなど様々な訳語があるが、本稿では特に美術の分野で多く使用されるコラボレーションの和訳として用いる。

2　作品そのものより制作のプロセスを重視し、美術館から外に出て社会的な文脈でアートを捉える取り組みなどを指すが、本稿では、美術全般に関わるプロジェクトの総称をして用いる。

3　金氏徹平、金島隆弘、三宅亜木「展示報告『S.F. - Splash Factory -』KYOTOGRAPHIE2019」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要第 64 号』2020 年、127-137 頁。展示プログラムのコンセプト、協働したプログラムなどを掲載した。

4　吉田雅子「『現代美術が終わっても』– 工芸と美術の新たなる『接続』」『民族藝術第 33 号』2017 年、236-237 頁。民族藝術学の現場（展覧会評）のセクションで紹介された。